ISSN 1342-4866

山形大学附属博物館報40

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　　2014. 3

目　次

異なる視点で「モノ」を捉える場としての博物館……八　木　浩　司（1）
いつもどこかの博物館　2 ……佐　藤　　琴（3）
資料紹介 －歌川国芳画「お竹大日如来」……（5）
平成25年度事業報告 ……（6）

異なる視点で「モノ」を捉える場としての博物館

八　木　浩　司（附属博物館館長）

2013年度の山形大学附属博物館公開講座は、「トチノキの生活史」と題して、植物としてのトチノキ、庄内地方朝日山系山麓でのトチノキの実の利用とその歴史、そして人為的なトチノキ林の形成について野外学習も含めて紹介しました。

トチノキ（*Aesculus turbinata*）はトチノキ科（Hippocastanaceae）に属する落葉高木であり、東北地方では山地の渓流沿いに生育し、とくにサワグルミとともに河畔林を形成しています。生育高度によるが山形周辺では５月半ばから６月初旬にかけて枝先から穂状の花序を立ち上げ、小さく白い花をたくさん咲かせます（写真１）。トチノキを知らない方でもパリのシャンゼリゼ通りの並木として植えられているマロニエをご存知の方は

写真１：トチノキの花

写真２：トチノキの実（白破線内がトチノキの実および種子）

多いはずです。そのマロニエはトチノキの近縁種で日本でも街路樹として植えられています。トチノキは、それぞれの花序に茶褐色の丸い果実を鈴なりにならせ、中に３つのクリの実のような種子を胎みます（写真２）。このためトチノキは別名ウマグリとも呼ばれます。大きなトチノキの種子（以後ここでは“トチの実”と呼ぶことにします）は、クリの実（堅果）のように大変おいしそうに見えます。しかし、渋みをもたらすタンニンに加え毒性のあるサポニンを含んでいてそのままでは食べられません。合計30日以上にわたる水さらし、湯煮、木灰汁との合わせなどの複雑なアク抜き工程を経てようやく口にすることが出来ます。ところが、“トチの実”は、東北地方の縄文時代中期末以降の遺跡から多く出土することが知られています。4000年以上前から“トチの実”はデンプン質の食料源として重要視されていた訳です。それは、“トチの実”の１粒が大きく、トチノキが

谷筋沿いに集中して分布することから効率的に採取しやすく、しかも豊作年で１本の木から40～80kg（400　500kg／ha）の種子生産量があることから安定した食料として確保できたことが考えられます。

“トチの実”は、縄文以降も東北日本の山地域や中央高地などの穀物の生産性が低い地域で、補完的食料として利用されてきました。“トチの実”に含まれるデンプンをアク抜きの末に取り出し、それを“コザワシ”と呼び増量材として他の穀物に混ぜて日常的に食されてきました。米沢藩では“トチの実”を飢饉の時に利用する方法が「かてもの」と呼ばれる書物に残されています。しかし現在“トチの実”のデンプン粉が利用されている地域を探し出すことは困難です。1950年代後半以降、山村においても出稼ぎや公共事業就労による現金収入が得られるようになったことで、敢えて手間のかかるコザワシを利用する必要性がなくなってしまったようです。また、そういった地域では現在“トチの実”に対する印象も良くありません。山形県の村山地方出身の方から伺った話として、お土産として買って来た栃餅を妊娠中の奥さんに食べさせようとしたら、「そんなモノを食べさせるべきではない」ときつくお姑さんに叱られたそうです。“トチの実”にはどうも辛く悲しい時代の側面があるようです。

ところが同じ山形県でも、庄内地方南部、特に鶴岡では今でも、正月などのハレの日に栃餅を食べる習慣が強く残っています。また、栃餅をハレの食物として好んで食べる地域は、庄内から日本海に沿って鳥取県あたりまでの山地を背後にした沿岸の都市地域に認められます。例えば、金沢の台所とも言える近江町市場でも栃餅が売られています。それらの地域は、内陸山間地域と較べると農業生産性が高く、海に近く多様な食文化がある地域のように思われます。食糧確保の点から見ると敢えて“トチの実”に高く依存する必要性がなかった地域とも捉えることが出来ます。筆者は、“トチの実”をハレの食材として利用することは、“トチの実”がもつほのかな苦みの風味を楽しむことができる余裕のある地域であることの現れのように考えています。

さて、縄文時代から安定した食糧源として利用されてきた“トチの実”が、ハレの食べ物としていつ頃から利用されてきたかを示す興味ある資料が、筆者がたまたま立ち寄った神奈川県立歴史博物館で公開されていました。それは金沢文庫の収

写真３：重文　金沢貞顕文書（称名寺所蔵：金沢文庫古文書166号）

この文書にはそれが記された年の記載が無い。しかし金沢貞顕は、1278年生まれ1333年没であることから、本文書は14世紀前後に記されたことになる。

蔵物で鎌倉幕府末期の執権となった金沢貞顕（かねざわさだあき）が、一族にゆかりのある称名寺の住職に送った文書（写真３）です。

この文書を簡単に現代語訳すれば、以下のようになります。

栃餅を一葛籠届けさせます
本当につまらないモノですが
三月二日　貞顕
住職殿

この文書は、紙が貴重な当時、古い文書の裏面にメモ的な私信がしたためられたものとして展示されていました。つまり栃餅というモノそのものに焦点が当てられたものではなく、当時の高い地位にある方の私信のありようを示すために展示されたものでした。しかしトチノキの生産物利用に関心を持って来た筆者には、この展示の意図とは違う別のことを幾つか読み取ることができました。まず、鎌倉幕府の執権につくほどの人物が、ゆかりのある寺に何かのお礼として栃餅を送ったことは、鎌倉時代後半すでに栃餅がハレの食品として価値ある珍しいものではなかったかということです。また、鎌倉や称名寺のある横浜市金沢区は植

生帯として常緑広葉樹林帯に位置し、トチノキは自生しない地域です。貞顕が“トチの実”を遠い所領からわざわざ取り寄せていたことが判ります。また、日付の３月２日は太陽暦で４月初旬であり、“トチの実”の収穫が９月中旬であることを考えると、“トチの実”の利用が収穫された時期だけでなく、収穫後一旦保存され必要に応じて加工されていたことも示しています。

博物館の機能は、「モノ」を通して私たちの知的好奇心をかきたてるところにあります。このため博物館には、「モノ」すなわち一次資料の収集・整理、収蔵・保管、そして展示が大きな使命として求められます。また一次資料には多面的情報を含んでいます。異なる分野の研究者に別の視点で利用されることで、同じ「モノ」に対して当初の目的以外の意味や価値が発生してくることが期待されます。従って、博物館は同じ「モノ」に対してさまざまな意味づけ、すなわち分野横断的研究を可能にする場であるとも言えそうです。

栃餅に関心を持った単なる食いしん坊が、その由来について調べていくと、植物から民俗、考古、歴史とさまざまな分野の資料に遭遇しました。その解釈について博物館を結節点としてさまざまな分野の研究者に意見をもとめることで、その事象を構成する要素間の関わりを捉え全体像を再構成することが可能になってきたようです。

いつもどこかの博物館　2

佐　藤　　琴（学芸研究員）

今年の４月からこの原稿を書いている12月までの間、博物館に訪れた回数は95回だった。来年３月まで加えると１年間で100回は余裕で越える見込みである。もちろん、同じ博物館に特別展毎に訪れているケースもあるため、95館の博物館に行った訳ではない。

博物館学芸員として仕事を始め、資料調査や展覧会の出陳交渉はもちろん、自分の専門分野の勉強のためや業務の参考とするために各地の博物館を訪れるようになって以来、毎年このぐらいの回数は博物館を見ている。だから、これまで1000以上の博物館に行ったと思う。ほとんどの場合は一人で。

首都圏のように複数の博物館が点在しているところに行くときには展覧会を一日に４つぐらいハシゴすることも少なくない。一方、自分の専門分野に関係する展示であったら、展示室に何時間も居て同じ資料を見続けることになる。同行者に気兼ねして見たいものが見られないとフラストレーションがたまる。そう思ってほとんどの場合博物館には一人で行くことにしている。

けれども、今年は例年になく誰かと博物館に出かけることが多かった。仕事相手と一緒であったり、気の合う友人との二人旅であったり、遠方に住んでいる友達を訪ねた先で待ち合わせをしたりして。友人と見た博物館のなかで今年最もインパクトがあったのは「八甲田山雪中行軍遭難資料館」だった。

最初に館名を見たときはこれを博物館にするのかと驚いた。しかし、博物館はポジティブな題材だけを扱うものではない。有名なものとしては、原爆の投下を扱った広島平和祈念資料館と長崎原爆資料館、沖縄戦を伝える沖縄県平和祈念館などの戦争の惨禍を展示する博物館がある。また、平成23年３月に起こった東日本大震災についても、今後さまざまな角度から取り上げる博物館が増えていくことだろう。このような視点から、私は機会があるたびに戦争や災害などを扱った博物館も訪れることにしている。今年は「国立ハンセン病資料館」にも行った。この博物館を教えてくれたのが「八甲田山雪中行軍遭難資料館」に付き合ってくれた私の友人である。彼女も戦争や抑圧された人びと、遭難事故などに興味を持っているからだ。

今年の９月、私たちは青森駅からバスに乗った。揺られること30分、幸畑墓地で降りた。この墓地には行軍で犠牲者になった方々が眠っている。資料館は平成16年にリニューアルされ、新しく建てられた当時の陸軍の兵舎をイメージした平屋の白い建物はすがすがしい印象を受けた。展示室も白を基調としており、随所に間接照明が取り入れられとても明るい。展示資料は行軍の資料や犠牲者の遺品であり、それに加えて模型や映像が用いられて悲劇が起こった過程を丁寧に説明している。行軍参加者の装備を身につけることができる体験コーナーなどもあった。私たちはパネルを一

枚一枚ずつ読んで感想を言いあい、解説映像に見入り、体験コーナーで写真を撮影しあった。見終わった時には館に入ってから２時間が経っていた。

展示を見て教訓として得ることは沢山あった。しかし、それよりも強く思ったのは友人と話をしながら見ることの面白さであった。テーマがテーマであるから、単純に楽しかったというわけではない。実物や当時の人の証言を、自分の視点とは違う角度からの意見を聞きながら見ることで確実に見方が深まった。それがいつも一人で見るときには経験できないことである。そして、命を落とした方々の無念など、一人ではなかなか受け止めることが辛いことも二人だと少しだけ軽くなった気がした。

それから少し経過した11月、ツィッター上で「展示室での会話」が話題になった。ツィッターはインターネット上のサービスの一つで、一回に140文字以内の短文（つぶやき）を投稿しつつ、自分がフォローした人のつぶやきもリアルタイムで見ることができるというものである。このため、友人同士が近況を共有するだけでなく、ある分野の専門家をフォローすると、かなり深い情報を得ることができる。私も博物館関係の情報を収集するために利用している。

「展示室での会話」は、日本美術ライターの橋本麻里さんが専門家の話を聞きながら展覧会の見学していたところ、監視員に話し声を注意された出来事をつぶやいたことに始まる。その後、美術館の中の人や利用者の立場からさまざまなつぶやきがよせられた。これらは「「他のお客様のご迷惑になります」　～美術館内での会話・スケッチ・撮影の是非（http://togetter.com/li/592315）」にまとめられている。また、同じような話は少し前に和歌山県立博物館の学芸員、大河内智之さんが「博物館は静寂じゃないといけない？（http://togetter.com/li/354672）」としてまとめている。

これらのつぶやきの蓄積のなかから見えてくる問題点を私なりにまとめると以下の３点になる。

①博物館にはさまざまな種類がある。そのなかでも美術館が特に静寂であることを求められる。

②博物館職員から注意されるだけでなく、他の来館者から強く意見をされる。

③子ども連れに対する対応をどうすべきか。

体験コーナーで友人に撮影してもらった写真

まず、③の子ども連れに対しては多くの方々が問題視していることがわかる。20年ほど博物館を利用してきて、展示を見ずに走り回ったり、大声で泣いたりしている子を見かけることは確実に増えたと感じる。博物館利用者層の低年齢化は今後も進んでいくであろう。しかし、子どもは展示室での鑑賞マナーをこれから身につけていくことが可能である。静けさが求められる美術館においても子ども向けの鑑賞教室などが積極的に行われている。この状況は今後改善していくものと思われるし、また、そうでなければならない。

それよりも深刻な問題は②である。映画などのように上映時間が決まっているものはその間にじっくりと鑑賞し、見終わったら感想を語り合えばいい。しかし、美術作品の鑑賞時間は人それぞれである。展示室という時間と場所と作品を共有しつつ、お互いの鑑賞をどのように尊重し合うか、そこがまだ来館者に共有されていないのではないだろうか。

来館者同士が相互に配慮しあうということは必要なことだ。しかし、この場を共有している皆のためにではなく、うるさいから、邪魔だからという理由で苦情を言うことが多いと思われる。ツィッターで話題になったケースは博物館側が来館者の苦情に過剰反応した結果、一言の私語も許さない

姿勢をとるようになったために起こったものであろう。仮に来館者から小声にもかかわらず話を遮られたという苦情が寄せられたとしても「他のお客様のご迷惑になります」を掲げれば博物館側が責められることはない。それを理解したうえでの対応だと思う。しかし、それでいいのだろうか。まわり回って来館者の満足を低下させてしまうことになりはしないか。博物館側は展示室の在り方や来館者の鑑賞方法についてまだまだ学んでいかなければならないと思う。

私はこれからも博物館に行き続けるだろう。大体は一人で、時には二人で。どちらのケースも楽しみながら。これからは他の来館者がどのような鑑賞を望んでいるのかも観察しながら。

資料紹介

歌川国芳画
「お竹大日如来」

描かれた女は布を手にしています。障子越しの男たちは反射的に両手を上げて、驚いているようです。眼差しは女に向けられているようですが、何を見てしまったのでしょうか。

この絵は実はある伝説を下地としています。今日、出羽三山（でわさんざん）と称される、月山（がっさん）・羽黒山（はぐろさん）・湯殿山（ゆどのさん）は、山岳信仰の対象として人々をひきつけています。湯殿山に祀られる神の本地は大日如来ですが、この生まれ変わりが江戸時代、江戸の町に現れた、という伝説です。その生まれ変わりは「お竹」と呼ばれた下女です。お竹は勤勉で信心篤く、五穀を大切にしたと言われます。それを印象付けるエピソードとして、自分の食物を貧困者に施した、米一粒、野菜一切れ無駄にしないために流しに網を張り、とらえて食した、という話が伝わっています。お竹はその徳から光明を発したとされます。

この絵は、お竹の勤勉さを象徴するのでしょう、上部の文章「或夜つぎの間に針業して」に対応する、夜の針仕事の様が描かれています。描かれた行灯は夜の情景を表しています。行灯に照らされたお竹の影は障子に映るはずですが、そこには仏の形が見えます。お竹がただものではないことは明白です。お竹の頭付近の丸い円は、光明そのものであり、男たちはこの尋常でない光景に驚き恐れをなしたようです。

本文を読むと、男たちは、お竹のうわさ―慈悲深くそして美人であるという―を聞き付けて覗き見しようとしたことがわかります。野次馬根性がくじかれた瞬間であったのです。

絵を担当した歌川国芳（くによし）は、現在知られるものでも９パターンの「お竹」を題材とした浮世絵を手掛けています。浮世絵では国輝、国麿、貞秀、豊国、芳虎作のものが知られ、合巻や歌舞伎などにも翻案されています。伝説の流行による江戸の「メディアミックス」がうかがわれます。

以下、本文翻字

（「／」は改行を表す。「■」は欠損部、繰り返し記号「〻」は「／＼」と表記した）

こゝに年ありて城東（ぜうたう）の驛（え■）に旧家（きうか）何某（なにがし）の下女（げじよ）於竹（おたけ）といへ／るは貞節（ていせつ）艶美（ゑんび）にして賤（いや）し／からず又貴（たか）からず常（つね）に／無常（むじやう）迅即（じんそく）の一斯（いちご）を悟（さと）りて／虫（むし）の命（いのち）も輕（かろ）しとおもはず一粒（いちりう）の／米（よね）も鼡糞（そふん）に交（まじ）へず妙理（みやうり）を／おもひてすてる物（もの）をきすく／或夜（あるよ）つぎの間（ま）に針業（はりわざ）してあり／けるが同宿（とうしゆく）の戯男（たはれを）たてやかなるに／心（こゝろ）うごきひそかに彳（たゞつみ）うかゞひしに／灯（ともし）の影（かげ）光々（くわう／＼）としてあたかも／如来（によらい）か仮（かり）に現（あらは）れ玉ひて／凡夫（ほんぶ）を教化（けうけ）したまふ／かと恐（おそ）れぬものこそ／なかりけれ／狂句／下女如来／障子（しやうじ）へうつる／法（のり）のかけ／一勇齋国芳画

【参考文献】

・牛島史彦編『江戸の旅と流行仏　お竹大日と出羽三山』板橋区立郷土資料館　1992

・小松和彦「お竹 羽黒山お竹大日堂」『神になった人びと　日本人にとって「靖国の神」とは何か』淡交社　2001

・宮田登「連載　江戸のフォークロア４　お竹大日如来　江戸の都市伝説」『江戸文学　第２巻第４号』ぺりかん社　1990

【参考webサイト】

・国際日本文化研究センター「「於竹大日如来縁起」データベース」（2013年12月９日現在）
http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/otake/top.html

平成25年度事業報告

平成25年度に本館で実施した**博物館実習**の単位修得者数は下記のとおり。

（単位：人）

学　　部	人　数
人　文　学　部	２６
地域教育文化学部	７
理　　学　　部	１５
計	４８

公開講座「トチノキの生活史」は、本館で初めての試みとして、農学部の演習林・鶴岡市行沢地区を会場としたフィールドでの実施となりました。山形市内からは遠方であるにもかかわらず、庄内地区からの参加者も含め、定員をこえる受講者が集まり、とちの花を観察し、とちの実を拾い、最後は「とち餅」の実食と、まさに五感で楽しむ公開講座となりました。

平成24年度常設展示見学者総数

※ オープンキャンパス・特別展の入場者は含まない

一般成人	個　人	６３５人
	団　体	９３
大　学　生	個　人	１，６４７
	団　体	４３６
児童・生徒	個　人	５０
	団　体	４１４
合　　計	個　人	2,３３２
	団　体	９４３
	総　数	3,２７５

附属博物館では、所蔵品を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。
お気軽に係員までご相談下さい。

山形大学附属博物館報　No.40　2014.３発行
編集兼発行人　山形大学附属博物館
〒990－8560　山形市小白川町一丁目４－12
（ＴＥＬ）023（628）4930（直通）
（ＦＡＸ）023（628）4930
URL http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/
E-MAIL hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp